

「地域の輪」が水害から護る

～五個荘奥町「奥村堤」の会～

五個荘奥町は、愛知川中流部左岸側にある人口338人、100世帯、高齢化率約35.5%の自治会である。奥町の歴史は、愛知川からの恵みと堤防決壊の災いとともに刻まれてきた。命を守る堤防への意識が薄まる危機感から、平成22年（2010）4月に「奥村堤」の会が設立され、堤防の環境整備と保全に取り組み続けている。

1. 「奥村堤」の会の発足

記録に残る愛知川堤防決壊は、明治39年（1906）8月に発生したものが一番古く、以降、大正5年（1916）6月、昭和13年（1938）8月、昭和28年（1953）に決壊している。

しかし、決壊の経験のない世代が増えて堤防への意識も薄まり、平成20年（2008）ころには堤防が樹木に覆われる状態となった。

平成21年（2009）3月に、堤防に県が根固ブロックを設置したことを契機として、堤防に対する意識を高めようと除草作業をはじめ、河川敷に試験的に芝生の種をまいたり、ふじつるや竹の伐採を行ったりして堤防整備活動を開始した。

そして、堤防整備活動を継続させるために「(仮称) 愛知川護岸整備の会設立準備委員会」を発足させることが自治会で決定された。

以降、組織体制と規約、役員構成の検討が重ねられ、平成22年（2010）4月29日

に「奥村堤」の会の設立総会が開催された。

初代会長は北川富蔵さん。設立総会には市議会議員、県会議員、元五個荘町長もお祝いに駆け付けた。特別顧問には衆参国議員、県会議員、市会議員も名を連ねる。

会の名称は自治会で公募され、応募31点の中から「奥村堤」の会に決定された。

その理由として、「奥村堤」の会の会長である沖 庄治郎さんは「戦国大名の武田信玄が釜無川の氾濫を収めるために築いた『信玄堤』に倣ったのです」と話す。

信玄堤は、川の流れの撥ねをつくり、流れを逃し、村を水害から守る。そんな信玄堤のような会にしたいという願いが会の名前に込められた。

また、「奥町」ではなく「奥村」としたのは、以前から、奥町は「奥村」と称され親しまれてきたこと、「須佐之男命」（スサノオノミコト）を御祭神とする奥村神社があること、享保2年（1717）11月に奉納された高さ



大提灯



沖 庄治郎さん

3.5m、直径2.1mという移動用で日本一大きい「奥村」と記された提灯（大高張提灯）を引き継いでいることなどからである。

2. 「奥村堤」の会の活動

会の活動は「堤防を守る部会」「緑を育てる部会」「広報部会」の3つの部会に分かれて取り組んでいる。

「堤防を守る部会」は、除草作業、堤防清掃作業を年5回（5・7・9・10・2月）、2月には蔓の撲滅活動も行う。自警消防団の団長と副団長が部会の部長と副部長になる。

「緑を育てる部会」は芝の種まき、除草、芝刈りと芝の管理を行う。

「広報部会」は「『奥村堤』の会広報」を年3回発行する。広報部会が把握した情報をもとに会員の研修が実施される。

そして、奥町全体で子どもも女性も一緒になって土嚢積みの訓練も行う。

沖会長は「堤防の異変に気付くためにも、普段から堤防の『見える化』が大切なのです」と話す。

周辺の自治会から、「奥村堤」の会が堤防を守ってくれているので安心できるという声も届くようになった。

こうした「奥村堤」の会の活動は、その実績が高く評価され、平成24年（2012）1月28日に開催された「第5回淡海の川づくりフォーラム」で準グランプリを獲得する。このフォーラムは、川や水辺に関わる活動者が集う公開選考



緑を育てる部会の活動の様子

方式のワークショップである。

さらに、平成27年（2015）7月24日には知事から感謝状を贈呈される。

現在、会員は61名。年齢層は40歳代から80歳代に及び、男性は47名、女性は14名である。奥町の人口は約340人。住民の約2割が会員である。

3. さらに活動のレベルアップを

しかし、課題もある。沖会長によると61名の会員のうち、活動に参加するのは1回あたり20人～30人であるという。9月に行われた活動の参加者は25名であった。

活動の主な担い手は50歳以上の会員となり若年層や女性の参画は不可欠となっている。

設立から10周年を迎える「奥村堤」の会。

沖会長は、「さらに活動のレベルアップを図りたい」と話す。

これからも「奥村堤」の会という地域の「輪」が愛知川と奥町を守り続ける。



土嚢積み訓練の様子



堤防を守る部会の活動の様子